

大阪府河川整備委員会 第 1 回治水専門部会 議事概要

日時 : 平成 23 年 6 月 8 日(水) 18:00~20:15
場所 : 大阪府立男女共同参画・青少年センター(ドーンセンター) 5 階 大会議室 2
出席者 : 多々納部会長、田中丸委員、中谷委員、堀委員長、道奥委員 計 5 名
概要 : [以下、○委員 ●事務局]

(1) 委員長選任

全会一致で、多々納委員が部会長に、中谷委員が部会長代理に選任された。

(2) 一級河川寝屋川流域の当面の治水目標の設定に向けた論点整理について 〔寝屋川流域の治水計画等について〕

○非常に複雑な治水計画であることは理解するが、河川、地下河川、流域調節池、下水道等の施設分担計画通りに実際の貯留は行われているのか？地下河川が未完成の場合の考え方は？

●内水排水ポンプの能力までは河川へ放流し、能力を超えた分は地下河川等の貯留施設へ流入する。

○地下河川が未完成の時点では、暫定的に調節池運用しているとのことだが、その際の貯留水はどのくらいの時間で排水されるのか？また、貯留運用の場合、流量換算でどの程度となるのか？

●地下河川の貯留水は 48 時間排水を計画。また、南部地下河川では 63 万 m³を暫定的に調節池運用し貯留することとなるが、流量に換算すると約 60 m³/s となり計画流量 180 m³/s の約 1/3 程度。

○施設分担計画での調節池 250 m³/s の下水道と河川の分担割合は？また、ここでの下水貯留とは？

●下水道と河川は 1 : 4 の割合で分担しており、下水貯留とは管内貯留を指している。

○個別下水道集水区の総合治水概念図での治水安全度 1/20 と 1/40 の降雨時間が同じなのはなぜ？

●ここでの治水安全度の違いは、総雨量が異なり、流域対応が含まれているかどうかの違いである。

○300m³/s は流域対応としているが、この進捗率はどうか。また、流量分担計画に含まれていることから、将来的な担保はあるのか。さらにはどのように進めているのか。

●進捗率は 28%。計画策定段階では流域内で対策可能な学校等の候補地の面積から算定し、計画量の確保は可能と判断。また、実際には、学校等では流域貯留浸透事業による展開や、600 m³/ha の開発流出抑制を昭和 63 年から行政指導で平成 17 年からは条例により実施。

〔「今後の治水対策の進め方」での氾濫解析に用いる外力の考え方等について〕

○雨の設定については、どのような視点・考え方でケース設定しているのかを示すこと。また、治水施設の配置についてはコストを前提とすべきだが、計画対象降雨と施設分担図での 1/10、1/20、1/40 と 50 ㄱ (1/10)、65 ㄱ (1/30)、80 ㄱ (1/100) との関連が不明確なため整理すること。

●これまで八尾実績降雨を対象に、放流施設と貯留施設を組み合わせ、施設整備をしており、等危険度曲線で評価すると内水・外水の治水安全度がそれぞれ、1/40、1/100 となる。

○等危険度曲線は、一雨降雨の形状をどう仮定して作成されたかを確認しないと、実績降雨の引き伸ばしとの比較はできないのではないかと。

外力の考え方も実績降雨で計画されているが、時間分布、空間分布をどのように評価しているのか。

●内水域について、下水道の排水区毎に実績降雨を与えている。今後、当面の治水目標を設定する際の外力として、80 ㄱ相当を八尾実績降雨、50 ㄱ相当、65 ㄱ相当は降雨確率を考慮してお示ししている。

○昨年度の確認として、「今後の治水の進め方」での治水目標の設定フローは、大阪府の河川全てに当てはまるのか。寝屋川流域のような特殊な流域では、時間雨量を別の目標に設定してもよいのでは。

○「今後の治水対策の進め方」検討部会では、府内河川全体を対象に定めたが、寝屋川流域のような特殊事情について議論はできなかった。

○検討部会においても本流域の扱いをどうすべきか個人的な懸念はあった。実績降雨で計画・実施中の寝屋川流域について、設定フローを当てはめるべきかどうかの判断も必要。

○フローは単純河川のイメージがあり、寝屋川流域のような複雑な治水計画や流域の資産が大きい場合は、過去の経緯を踏まえた考えも必要では。

○対象降雨について、80 ㄱ降雨は寝屋川流域での現計画降雨である八尾実績降雨とし、50 ㄱは最低限での対応と考えられるが、この中間目標について、設定フローでは大きな分岐点のため、総雨量、ピーク雨量等の特徴的なパターンを作成、提案すること。ただし、全てのケースで氾濫解析を行うと時間を要するため主要・特徴的な外力を与えればよい。

○50 ㄱについては、大阪府管理河川の最低限の整備水準であり、確実に保証しなければならないという観点、および、流下施設と貯留施設両方の性能評価が必要であるという観点から、案の八尾実績Ⅲ型引き締めがモデル降雨と比べても適切と考える。

○中間目標の設定については、今後の計画が不利になるような雨や貯留施設の配置を考慮した雨など数パターンを検討し、次回提案すること。

まとめ

- ・寝屋川流域の特性を考慮し、過去最大である八尾実績降雨を 80 ㄱ相当雨量(最終目標)として用いることは妥当。また、50 ㄱ相当としては八尾実績降雨のⅢ型引き締め。ただし、中間の雨量については、数パターンの対象降雨を与え、治水施設の効果も踏まえて検討を行う。